



武野燭談

參

增
775
128



管4
775
28



武野燭談卷之九

松平越前守先通が將に味成丁寧なる生備ふと
又社の様と遠くきん丁酉の大災の後沖家の方
二家越前守が部外不慮なを強りせりお附長尾徳
少く此越前守が宿造せりひちり小寛文中の二月
大大此不及び一時期と目この社も山内印
打寄せりひ沖をがれは近く社と繋るるは
少船引く社の進退時いさり小館の餘矣船不移り
陸より吹をり黒烟大息をれは滑双つる信船統たり
あり船小越前守及の川に流す度と大なりある先通
此船中ふく社をりともお少社の紋布切捨下と
下知御りくあり風起りては沖へは船ても出されぬ



足指をうしふふしつて破隊の那彼此何ふ魏軍の周氏
少み脱れたり未詳の者成思ひ居るなり一幸長小
大敵院教薨去の節西の丸大廣間一大細玄教
沖初少るれ一幸一此處と何ふ者もりり一某討てたて
了りしを牌宣ひ一數多御多て武の吟味も濃うなり
一寛文の始堀の上野介正儀居居一玄區一時小庵從
何り一とや共一騎押送と云えと一仇倉まて依り
たり者り知りの者と為人感して此小臺城旗本の歴
史持るの中一も石谷十飛越一石抱りり一これ
と相りり入り一と云も一と云り一或付去小常一越前
少將控持る者り一惟抱一と云一上野介一依よ
く去りり者の儀を一抱一中一外者た一後と虎目

城ては侍小車と依り家中の士家あふたれて詔少少志の
者一人も無ゆ一介小未り一小たり一と云一と云ひ一と云や
一保科肥後守中将正之とりせ一相國秀忠公の御末
子母ハ竹村氏の女なり一其は侍とせり一事一とて保料
淨正忠正先々事ハ一大神君の御妹御一於霜島小
長育野をせのひ一ふりり一保料と氏一は稱せり一内
と云や武田万子代信長の母堂見姓流友内一長育をち
る一と云一抑保料ハ古々名実あり一と和名類聚
ゆは穂科と云一盛衰記一ハ是名一吾妻鑑一ハ保料
と云一と云小徳頼氏一と云一信別先方井上掃部正
貞共子淨正忠正忠と武田の義平小たり保料淨正
と云一一人の子ハ別正忠と云一の肥後守正之保料の

嫡流統として依りて遠の城を——二方在家督よりく
ある寛永九年縣日十一年上流の依奉事内侍は
但し河内日十一年八月出陣の山形古万石をなせしは同
其年會津小幡り七二万石法候の列ありて正保二年
三月改位上流將 家綱公沖元殿の初理發の役を
勤る兼應小右近中將天下大評定の列ありて
重く河内—ういの人なりある會津ハ三浦若名殿
數十人守護ありて時之後替く仙臺政宗領知りたりと
秀吉よりて 細川越中守忠興よりて—うのれとも—
色ハ蒲生氏郷小幡りある氏々早世の上嫡子秀約
御ありれハいぬる上秋宗勝とみく守護ありたり是も
家よりて秀吉これより長六年の後又蒲生ト野也

秀約城主たり——小早世ゆへ嫡子忠也家督形保ち
とせしも早世ありて家督和家とつうとせられん
と——と因縁ハ依りて家督和家とつうとせられん
護ありけり方をもく病氣ありて死せし子或致を捕
め成存せし城地有とあり天正九年寛文七年小幡りて
与後の惣昌守りて和家よりせし風ありてあり小肥後与
西と守護せしとせしより其父子相續ありて是ハ守護の
長能在ハ留ま人もあり西ありてはこれハ此係科
肥後与大目小幡りて家の法令先家司中おあり
吟味事稿——とせしと知りてはね日法精
選の上秀吉——ある者ハのテ家小喧嘩ハ論議く停止
と書たりは肥後与家め終ひ——ハ孫中上流の良喧

そくし書法を傳へて上座をよふ令座より人考せし
向く時小座場何方そや、名不樹林成伐案わく物不
も何しはしそ中ちり朧法を治とや、か語りたるし書益
の事と云ふよりして悉く押巻ふして並れりるそや
は安面は案の依取平たの、長川市と懸安敷六節な案の
是書は文育す一の男とも取し、た書武道中一ふ
みづきし、好ふ不願内おく、河内れ者、の物ふ云ふこれ誠
も縁成り事とも多し、若草成り事ともや、まらん横目
書付とひとく、中ちり不肥別、注とく、吟味をうると、一取
採不書ふおひ、此く、徒らつ、のり、次書、江、注、り、事、付
と、八、麻、の上、ふ、不、重、れ、ち、り、ゆ、一、例、の、男、た、り、事、よ、く、出、書
も、杜、ん、知、り、げ、知、り、う、ま、し、と、か、ま、し、く、と、色、ち、り、後、め、を

目付の書物たふとれ、何の忠告若う事よとく、さひ、智、り、
ちり、西、く、智、用、中、知、成、加、し、終、り、の、一、家、月、傷、良、不、書、時、
さ、り、ひ、し、門、の、存、疾、を、り、ち、り、其、法、物、氏、書、の、取、成、を、り
ち、り、ふ、入、ま、る、う、と、も、皆、く、沙、汰、を、う、り、し、一、不、安、面、依、取、長、川
を、敷、目、人、の、溢、れ、若、た、時、り、長、ち、う、し、の、下、知、く、元、を、法、取、人
不、残、也、城、せ、よ、し、の、觸、を、り、ち、り、れ、一、家、中、卷、く、と、色、ち、り、
る、事、り、何、の、男、た、り、時、り、仕、書、ふ、お、ふ、一、必、定、切、後、う、放、し
付、り、進、放、を、し、し、よ、も、ち、り、し、一、日、取、徒、重、こ、し、一、し、学、問
講、習、の、社、お、は、法、し、う、め、し、り、文、育、若、た、の、す、れ、の、果、見
よ、や、し、く、そ、中、ち、り、高、日、口、人、の、者、成、取、ひ、と、し、一、酒、等、り
め、録、一、く、字、お、く、り、若、草、成、り、と、も、様、と、し、一、中、小、年
小、さ、く、り、若、た、一、字、中、一、別、し、く、一、氣、町、人、と、い、し、り、め、家、取

と成致りたるひ悉くゆり目付た其方四人の事
れり申たり申付救通あり候し御あま對し柳不忠
きし武士の吟味濃うなり不法とて汝れ文育のあ
書籍ふとも名り者い申しも不命ふ依てさうり
うと見入り向後と唱え暮ふとて一 吉川市と乞
めは籠と形りそ安田八重の依致年あめは世とく
ぬれ先子物致と申付り春夜六節舞のふ使者りひ
けりとのい事とて家中一巻と稱りのおたると
此四人一版と勅方と稱しと見れい合津文
とてりりり見せひとて徳と人といふとて文武とて
しを而まされぬれ御家目とて是法致人法士の事
と者たの形ひ又い家中の風俗若知不付と家中の

者たの夫の事よりあふ汁とてい離るう守給ひて忠事云
極ふより成家用とていあを然^{ニシテ}致人たのお疾おまふ成
いあふよりあふと大さふ家味合遠ふ事とて文との^はま
回復とていお疾事滋とていあふとてい内名相疾
者高よりあふい依筋お遠とて年あたも右の致いゆ
者致の者おとて定とていあふの依い仲るお疾とて
てお計りさうん候し家老とていお疾とてい若し家老
とていおとていとていとていとていとていとてい
向後とていゆし大目付並目付の若たおとてい
大目付の依候し若年あふ以上者致年あたの目付の家
中の事い並目付の依と大目付の若た今迄のいとて想
家中の依いぬれとていあふの依いさうし並目付大目付

家味解ありし一家縁者をうゝ武士の上小吟味をうゝ
事ハ老直わゝゝ押は度お城とて大作付本城の
馬込ハ常用く福の向く其跡に守り好小女懸ちう家
とも若狭守と宗越とせたり候一切の共宗と使の
當なりん馬込と入る候ははは園事(子迷)下下
り親家子方向後右弟を又不通とせり候もあり
お使とせり城居た守り候と一門中にも宣ひせり
あり候小越前家立府の一門分合波備たをうゝ
松平以持守経道宣ひし今度若狭守り物りし其ハ
むくあり候作し沙巻なりハ上使小左法人の前上使
小向小直丸の如守なりとあゆ念之若狭守田村と不通
の上ハ一門の門も同前たるゝ宣ひしとや其後松

平直丸と直法直法とて双方に事小振りし事ありし
一松平直法傳長品奏沖紋沖諱の一字終りしは契
しりもれハ元家紋ありし候事な候沖一字ハ
那をくゝゝゝや富永元大地震の後神田橋筋
直法直法の作付しとありし候の者を見る大右の格とせり
我終りあり奴系一と成紋ありし候も其ハ貸
ても我々家来と不仕法ありと成紋しとらん小竹の
子細とせりや其証しり若たも終りしと宣ひし候
其後結の者大の我終りしとありし候越前守りて
つりまれしと南阿致生禁止せりし沖家門ありし
水戸黄門元園心し此を於尚書斗一糸を急なりと
あふ元山願分をうゝ今ハ沖代左木の境ありて

これ等ありて落しるべし沖代友なりし高道の下
田細端敬くくく上あり成主下の百姓一人而れ
成事とや中もん今更意介成ゆりふお切れと下知せ
らまきくお忽小成放たるをひく沖代友が勅定を約
中へ証の勅定ありくむは(ませ)ふ小室永徳後各
重主有なり百姓も定く意介中なる下法の成放
よもひまきく吟味多し一層の成放沖家門も子細と
同の屋々れも意介の先々その事々く推量の有ふ亦
四條きく切をくく沖順の百姓小成りくくして元礼のた
らん御く意介者成終も此等あり批判もきれく
元禄年中中領執統せく時くも上池大酒を根本
中堂亦小初列とまくたきくありふ道智き人けく

秘流の小垣牡丹を放りくく是てあれの事なりくく主
出りてくくくハハ館も所執統侍り小垣の牡丹を流ふ
入りてく切りたるよくく甲もれハ家統ても若くわくはく
室介一侍れくは死好めて名死給ふる月ハ友の牡丹ハ
未勅交代の侍小持せくは本々く日光沖門之大明流宮
也非くはあをまきく一様もくきく介ハハ死文小か
一水戸松平大守以親貞迄亦大酒は作付小石門沖敵の
大酒をく流たきくハ流るゝ家中の士ハ屋根ふよられ
と御心下控さ者中中居ハ亦所馬存行ハハ屋根ふよ
厚く定めしわての御く流士力と命せ勅めくく下知
らありま御ふ此大守以親せくれお酒く為の亦御く
いふ事おはく下知さく小屋根も迄ありあらん者ハ付

於小寺... 兼て定めおれり想して水戸の風骨を
をり... ありとありと

文政十一年癸亥十月二十八日於益城郡大郡庄目丸山中写之

中村直衛

武野燭疾卷之九終

武野燭疾卷之十

一 忠心内小動あり義風外小影をまといふ事なり酒井
雅樂次忠世ハ忠義と先小立てて自己の威光を御とて
さし者なり 東照宮の時神谷を在り姫りてたはれ
あり付途中少く雅樂次小分ハ彌平禮とせし小
雅樂次何と別の事とみひゆりもやれと不文也ふ
りりあると後被神谷雅樂次小立ひて先礼意外度
小立ひたり此ハ開成也兼外御の御詳に於て神谷
眼とてその如きありを内と小立せしハ神谷人柄遊分
よくして殊文也小立し小立し... されハむすねの者
正仕りれり暇次等ハ世ハ法也人カ成願と歎ひ記る
愈し一可ハ雅樂次等と忠たりかと思ひなるハ真実

沖守をねい二子をうをて飛くらん舟を成めくはねか出約
米の子をてませく作し向く非あはは非く二子存く
いあ財介の形はた中級たり子も存く下を飛く者一同ふ
らん事にはくそ執とく相紙読むと七部とあはれ
上の名をく非あはは向くは向く子存るの折
紙とてふもれいと七部存るのまふふ威波と流し折
紙頂裁沖城よりあふ非あはは向く流し折
中ふあり其後走りたりよりく人物之も非あはは
実神小初めあはは其後足程とも折くまありされは此
事と 東照官作せられ九誅言を用ひれは人せは非を
いれされは人改あふ悪人のまは元より用ひふは家
大将の目利くく其く人の親のまふふ家業を忘ぬ

と教ゆり武士いあもれとも言君ゆりぬ時々家中も好ま
武を忘れ男のまはと孺ふ時い悪く女ゆくまはのふま
ゆき金銭対流の節は都文下紙の者よりしたはるすと
まは親の流めくはた申く結るは迷ふ用ひくは流金
あは政たの吾事とてやん人ハ判き事の所之忠信成
あふあ流れとてく大月あ方位の高卑いあもれた又
まもあむるく節紙越りい悪介のつらくはあむる中
人とも知く一家用い勇と取まくはらうそよあれ流
人の流を押し自じの威と付んくまはは不忠のまはもの
をり使いゆりの事と分別せたり修者い分別智あは
家元大男の上位の方ふのまはあむるつらくはあむる
まも智恵もあむるまはあむるくはあむる(遠)くは(遠)

酒井備後守之不若主修少く居りし中付く事あり是誠
亦思實開し其色備後守ハせられたる所日能小温知所
く智恵者ハ少く慈悲深し凡世智恵者若ハ何の益事
事小法人と流るるか一用小主事ハ死考ふ事これハ
しそ知友利ハの者のお事ハ一手者りとのよたそハ
大契海軍部ウ知め相成とほじう百姓たふく共利事と
死考ひ又己ハとらるる知も亦の事ハ死考ふ事一むと小武
士の道と不知知もとらるるむとの物ハ益とらるるむと
利倍とん柳々ハ町人高貴の業をらるる武士道の大業を
疎ととの上考ありしとらるるこれハ小校長久子の後小本
多忠指指割られ行候初也ハ小鉄地のお備後守とらる
たりの物小ありけり公開し其色考れハ古例そとの

修しとて家りしとらるるハハ備後守少付といまも酒井
と七郎とらるる十六歳の初孫ありし然も首尾を合と
手物の中在りし首尾も書載し居

一 二河板橋の百姓修りる事ハ云々歟とらるる小其附の
事ハ多修修修の事ハ云々歟とらるる依此因縁ありしと
方々歟とらるる思言ハ修り割ハ落書と主めとらるるハ
修修の事と云々歟及余談しといふとらるる修修の事ハ
此方ハ彼百姓切て修ありし後又酒井重忠也是の云
事割の附板橋の百姓のやと思に考りしと云々酒井再ハ
と地下人と修修又修修といふと修修の方の者小修修
修修の事小修修と流し修修と修修と修修と修修と修修と
修修と東思實開し修修と修修と修修と修修と修修と

主分ちてさういふ時におりやー河内ちやハ妙也成者と
切つていふことの事約小者なりとちや有る人々くの政乃
白れハ妙理成物知り人々ふる河りたりふま令ちりハふふ
送ふ者以教習ハ定りたり事少くハ不教くハ流る事
よとちや切く不接証の事やりさう教さくちハ止事と
不れくその事とされハ尚書徳者善政兵善政在養民
と見ふハちやちりめそ一入河井と種死小定くハちり者ふ
子殿く巫馬朝く単父の政事とゆひハたふハふふ在り
一未思定漢書沖立城の部沖河入河埽跡の時河記の赤
川東下人養る養るり是ハ沖埽くハ養以漢書ハ作也
せくく事約小作せくちりぬハ人形り漢書ハ作也
送りたりとく本多他身ハ養をさく子細と問ふちりく

のうハハ後付者昔ハあれハ別人定み付く打碎く後たり
相身約形りたり人々ちりハ漢書ありて上ハ天下とも
中意ありん人衆人と養めて教をさく罪成れをよふ不仕
並ちりそのあしハや他身ちりて養とハ打碎くせくちり
とく一言も残くたハ後河りりてく下知くちり就
小事約くちり者其の終ふちとあれハ未思定跡ハ赤面
河り終く他身とちりてく事終りて終たり也くはたの
上名ハ他身ハ流く君臣余神と人々感く
一或云作身ハ此財ハ不感と思く妙也さくハ不忠とれは
財の風俗ハ是ハたり子細を先待くてちり妙く内く
めく伺ひたりん妙也さく
一本多他身ハ下の情不終く考へたり者之ハ別ハおわて發

河内と宇石と傾く正保四年 家光公御前へ
伯耆守忠精の奉る事 不意汝ら事任者より我ら
仕へし極ふ 竹千代 家光公御前 正保四年 小倉公より 一と仰る事
信別小浜の城より 以任付田万石と云ふにけるは 伯
耆守より 仰る事 上意の事 以任と仰るに 減ふ
伯耆守 任付の巻れ 忠臣家より 仰る事 仰る事 仰る事
用持者事 家光公御前 正保四年 小倉公より 仰る事
寛文二年 大坂沖城代の以任味より 小酒井室中
推挙より 仰る事 正保四年 大坂沖城代より 以任持者事
仰付る事 仰る事 仰る事 仰る事 仰る事 仰る事
忠胤内後 仰る事 仰る事 仰る事 仰る事 仰る事 仰る事
此時より 小倉公より 沖城代より 仰る事 仰る事 仰る事 仰る事

武野燭談卷之十終

市老してゆれおたり是春末の小役人合衆の下相蔵の下小
切河一たり来多と遊し出ける瓜おきての事とちや也
と堀向家の奴隷ハ合羽と停止しと兼と悉せたりたり
と取む者の義美ハ寛永初年迄も上下用ひたりし小
寛永初年の年の上流小西小石多々戸経紗の相蔵
と為唐が交度しと小庵後小君をたりもよと御たり
かり類も結重の節も三時の虎臣のふふとく思ふと
其後しとの流りハ仁政ふあはれと汗をくまふ
ゆきれがり切るとの来多相おれと相蔵とと流さずふ
おせ後とつひととも元ハ盗取の中をさすふゆ熱
あふ相おととゆる人多かりか
一と井大炊次利勝着のりと相お 赤馬堂は作ハ沖族

今の末は成ては作付思ふ少く彼者平生何れの人柄
そと大炊次小沖尋るふ小此者忠宅ハ流ふ出入り信
取候と不給とととるれハ沖城棟君友相くはハ流
の若ととをたふとふと 我口忠似ともさり若ら葉為ハ
解り人のあらまはと力代の者おともさきに共方可
出入せうり取不知らは下道な一人の若思と礼と能
者の理をさり取ふ元より忠教若のお来より相おむ上の
非流りハ誅言ともやとけりふた相のりと下流河
出入る若斗の長思と能知りて他と不知らととかく打
控む河の河の河と出入る若斗と中少く控と云付の
形紙ととくハ世春と大炊流り（出入る若ととと勇力
りと流河流せハ流流と余り若縁ととととと流り可

徳も不自也小きり心も弱ふふと礼を(と)事も礼とせむ
せむ一これとせむも流充毫(と)せむ事も不穿贅をりハ
之君の用ふて長者と判り於長人と遠くけ悪人と致ふ
之のそそ気返同氣おれりけり事句れハ家元ハ古の
良弼忠臣の徳とせむ家風素より極ふりし九名社の
政たと元として家声とせむ家とて(と)おる家とて
せのり(と)はく事そ者後より(と)はく(と)民ハ深政と然(と)探り
衣室と(と)人うれひ神(と)り(と)此(と)時(と)不(と)終(と)家(と)司(と)者(と)不
帰(と)し(と)ぬ(と)れ(と)政(と)た(と)武(と)た(と)又(と)新(と)り(と)ゆ(と)ハ(と)不(と)知(と)不(と)角(と)小(と)家(と)元(と)ハ(と)忠(と)臣
才(と)一(と)又(と)ゆ(と)む(と)し(と)又(と)汝(と)の(と)ふ(と)事(と)極(と)り(と)る(と)極(と)勢(と)り(と)し(と)
あふ(と)より(と)し(と)ハ(と)一(と)言(と)の(と)氣(と)休(と)合(と)り(と)不(と)知(と)る(と)事(と)も(と)汝(と)の(と)言(と)ふ(と)事(と)
少(と)知(と)せ(と)く(と)付(と)や(と)り(と)と(と)り(と)あ(と)り(と)ハ(と)長者(と)ハ(と)恒(と)為(と)者(と)也(と)又(と)高(と)家(と)の

運のあか(と)心(と)付(と)テ(と)老人(と)の(と)力(と)不(と)衰(と)と(と)用(と)ひ(と)資(と)と(と)て(と)考(と)る(と)
子(と)と(と)名(と)代(と)小(と)出(と)き(と)し(と)し(と)心(と)付(と)く(と)武(と)た(と)表(と)り(と)極(と)不(と)足(と)收(と)す(と)之
天下(と)と(と)治(と)り(と)時(と)ハ(と)法(と)士(と)の(と)流(と)の(と)さ(と)わ(と)り(と)極(と)不(と)し(と)執(と)り(と)ひ(と)者
之(と)職(と)の(と)面(と)も(と)心(と)座(と)と(と)河(と)小(と)出(と)り(と)と(と)り(と)極(と)不(と)仕(と)直(と)す(と)し(と)
長者(と)の(と)志(と)ハ(と)度(と)小(と)の(と)さ(と)り(と)と(と)は(と)不(と)知(と)り(と)時(と)も(と)長者(と)の(と)言(と)代
方(と)極(と)不(と)も(と)ぬ(と)れ(と)那(と)き(と)ゆ(と)ハ(と)不(と)礼(と)せ(と)り(と)も(と)お(と)ら(と)ぬ(と)ハ(と)法(と)士(と)の
は(と)ま(と)り(と)れ(と)ハ(と)心(と)付(と)し(と)し(と)家(と)の(と)末(と)に(と)成(と)時(と)ハ(と)大(と)將(と)も(と)將(と)の(と)爲(と)す(と)
あ(と)き(と)ゆ(と)人(と)然(と)ハ(と)心(と)付(と)し(と)し(と)あ(と)ひ(と)て(と)も(と)仍(と)り(と)ぬ(と)事(と)の(と)さ(と)り(と)し(と)
何(と)の(と)益(と)も(と)な(と)付(と)ら(と)ず(と)中(と)治(と)り(と)極(と)不(と)れ(と)も(と)あ(と)り(と)も(と)お(と)ら(と)ぬ(と)
し(と)ら(と)ぬ(と)事(と)ハ(と)皆(と)付(と)き(と)法(と)人(と)の(と)言(と)不(と)衰(と)し(と)し(と)妻(と)子(と)家(と)族(と)不(と)成(と)
印(と)れ(と)く(と)群(と)先(と)曲(と)り(と)者(と)も(と)只(と)紙(と)也(と)も(と)男(と)ハ(と)男(と)は(と)能(と)く(と)も(と)不(と)
男(と)の(と)言(と)と(と)故(と)も(と)心(と)女(と)と(と)士(と)の(と)言(と)代(と)を(と)く(と)用(と)し(と)し(と)由(と)一(と)号(と)

志細ふ大政所仰沖の後わり〜〜〜我と枝敷と云
交度〜〜〜勇義男め〜彰りふ丸〜〜〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ
用事〜〜〜れ侍川波に終る人おられ侍侍は形誠の
忠臣なり〜〜〜殊ふ責ある〜〜〜ん

一 武士の智勇小力量と兼く生れぬたりの誠ふ士と云
力より者いさく、智勇わく、十の〜〜〜八九の血氣の
て悪人の仕事暴虎馮河のたらしひふれ〜〜〜智忠
吾はふ務り人の其力量と用い不活義ふ吾りゆふ言
名法教を〜〜〜徳川家大次郎わ〜〜〜人の御さ
援群なる智勇兼備〜〜〜人々多るも笑〜〜〜其内が多
平八郎忠高の子平八郎忠勝又徳代々の忠勇能中
忠勝ハ 大神君の沖時を別而〜〜〜大政教ふ此と令せ

武田家の流石の勇者も古風振ひ〜 初彦侍の勇力
の突へたる〜〜〜平八郎忠勝り終〜〜〜退り以慕ひ念
をんとあけふ終終切〜〜〜やりふ大池と石突の如と
行も誠なる振也〜〜〜あ〜〜〜みたる教つ〜〜〜鬼神も
か〜〜〜熱身と〜〜〜進付は〜〜〜〜初彦侍〜〜〜大
法と龍舟の古〜〜〜者〜〜〜も用たり事なり〜〜〜此忠勝師
川合戦の付加縁と信長より乞色 大神君沖時馬下
成山内侍定るありふ其席〜〜〜何〜〜〜あふ忠勝と
ありい流石流石の法大ねと云〜〜〜推系と〜〜〜人附〜〜〜
事〜〜〜なり〜〜〜信長と云〜〜〜の味方の柄〜〜〜
あり〜〜〜ねもあ〜〜〜い敵とい討死仰〜〜〜またね〜〜〜
事〜〜〜終ひ〜〜〜此度の沖時侍ふ大事〜〜〜〜〜

もりの海は沖時の

と先師より此の末の辰と為る向ふ水口越へて那由
と受けぬ故天人故と置る一は為るとも多良尾谷
まで向ふせりふ多良尾谷集入仰と存ひあき入
まへんと池をくちり酒井屋の村に下敷ひし
敵國の弓をれい人のふ那由なる一接野をりふ
忠務をいひて博の那由の里とせりあき今も山を
橋を振の介用をなく糧よつれむ振那由ふ及びり
多良尾のり一送心河一は家小入せりわきも道し
まへつれり者もあふ振小御さつひ那由り
一西谷多良尾の地を小住せしき一向の橋を掛くま
人馬の音は彼めく向へ一西谷多良尾ゆり今もあき
来石捕てめり振もては山氣をいさく入仰を屋

との成むく作くも彼家小入せり一は二の志と存
て上下の音といひしけりま振小多良尾のり一
と下それより伊賀越と成時ハ勝部吉元支配の
甲斐の者も親類多く流ひなり一は急伊勢の浦
河をせりし山にありて山師流もあき山梅音ハ
場より一西谷道もれも中伏もあき一あり
大神君ハ忠勝り其あきの彦友村をて人候ふあり
紫宮り親類多く案内者小進一は北代の親を
く宗后と終ふ遊れて其人とあり一遊り向ふ小懸橋
山よりと那由と存一ありと遊のあき山師流をく
山師流と成者とれあきの音は作くまおと一橋の
自現る一は山梅音ハおと一あり一は山師流と

始りぬ〜 尼戸居は自然家々せむひ〜 や〜 時
本多平八郎とて 人情家よりいふも 終り神策ゆ
少く終り世系傳ふ所のと意をう〜 少終り〜
大岡家後方の人殺を何とも思〜 押ぬひてを別
よ〜 一人局の正徳も〜 大系列を別出する
法山編り子の人殺め〜 天就道く働く時と折節
徳川家の我士かく〜 戦りは中り〜 味方利ありん
るを〜 終り去程ふありやあり〜 天就川と想
越〜 小折入あり小平八郎何のや〜 終り〜 一騎
馬と〜 十石斗遊りま〜 山標〜 先勢百騎
斗詞と〜 けて逃散り〜 河牛〜 走る
逃〜 けり世系ひ終り神の波濤の疏るのや〜 以の

介小終〜 ともや ぬれもん 何の平八郎〜 一騎も終り
せ〜 逃〜 ありぬ〜 終り〜 又折入〜
向の終り〜 折り〜 大河と家越の中流〜 川
逃〜 ぬり終り〜 事〜 平八郎働〜 終り
乃〜 小折〜 天正十一年 小田原より折通〜 何〜 時大
岡家〜 奥羽 枕後 赤松 忠信〜 曹の神と折り〜 何り
終りの終り 後軍の内〜 折〜 忠信
編り〜 終り〜 大神終り〜 終り
神旅終り〜 此曹氏平八郎〜 揚り 今たり小英雄
多〜 終り〜 忠信〜 曹氏終り〜 終り
終り〜 此曹氏〜 秀吉〜 今の河原終り〜 終り
終り〜 平八郎〜 終り〜 大軍の内

と成振ふ小登ひのち名実^たなりと口しく小せし時中多
りやしく忠信の武勇小あやうふ不及赤葉と一赤葉
心を一赤葉の六位の子に我の心小葉の君と信
一義経も目撃され忠信の曾よりも我代々麻の
角の曾こそ秘流されと云ひし松葉志多一其法
石門の者も救ふたけい大岡家忠實と云ひし徳川家
馬の法約の心伝葉んと云ふを感と知りて一忠信
のり事と云ひけんされ麻の角の曾の嫡子忠信と云
信一忠信の曾ハ二男忠政小流りてありぬ志多と云
思ひちん殺とも成と云ひし一赤葉のりともや此忠勝
赤名の城相領し一本丸の城城ハ櫻切ふけをせあり
海岸小築出する城され石壁ハ赤葉の心伝下夫小
射せんよの事の子息忠信と云ひし一平八郎の時二男
内丸と云ふ此秘流せし一又中智尼と云ひける家若
うりし時ハ小力ゆ一此の御守一今ハ御息と云ひて赤葉
子り人教と云ふ所ハ一赤葉の秘成人教傳えしと云
大物の知と云ひし一赤葉の心伝と云ひし一此と
おて秘流と云ひし一赤葉の時お思ふと云ひし一此と
ありしと云ひし一赤葉の心伝と云ひし

文政十一戊子年十一月朔日於益城目凡山中寫之

中村直簡

武野燭談卷之十二

一 柳原式部左衛門伊勢仁本の傳流して累代武勇の
名家也康政ハ 右神君小佐（小吉と号して御先
手と稱り一生むねれとて）小枝少孫の長女は秀吉
公と通りて而も小礼と書て織田家小弓と引く事大
悪名をとりし也 法人よ名せりし柳小豊臣大不怒
子戸候とみて柳原の首小弓（一）怒りた彼小
平々と稱しむ討たしと法將小觸とてしとや其
場ありして伯耆の柳原の豊臣家（内通あり事とて）
知りて長久寺（忠節小内也とて）（一）され其後秀吉公
関白小弓の京御小新法 徳川家と縁と結りしとの
事一とて結納の由使とては秀吉公とて小柳原小平を

疎きながら何ぞして私の目半ふつふ半よてもななく
坊々といふ事一上関の途一トトサレる事よともな
何れふの信りぬる事ふくみおかぬぬふぬぬ
毎事流とよと果と半判とやせともんぬく信り
トぬれハ 上神若御公解けたぬもたぬぬぬぬぬ
其若ともあつちりぬ一 新の軍の事ゆ
ねと思ふも信りぬるぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
御理充法成事山と果と補業成と関門ぬぬぬぬ
此何れとよと信りぬるぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
一関と果と御公解けたぬもたぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
信別の先方真田西房とよとぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬ 上神若御公解けたぬもたぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

上関の途一トトサレる事よともな
何れふの信りぬる事ふくみおかぬぬふぬぬ
毎事流とよと果と半判とやせともんぬく信り
トぬれハ 上神若御公解けたぬもたぬぬぬぬぬぬ
其若ともあつちりぬ一 新の軍の事ゆ
ねと思ふも信りぬるぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
御理充法成事山と果と補業成と関門ぬぬぬぬ
此何れとよと信りぬるぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
一関と果と御公解けたぬもたぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
信別の先方真田西房とよとぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬ 上神若御公解けたぬもたぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

能事の振掛の最と云せ四後と云せありも中多能後
者ありありと云く今度のも由表の事といゆ
中開ふは家人とも振掛ゆへと云せしと云く理運の由
事なれは神天子の有りなりと云くしと云く
大神君合神の位と云く其代の人とも威なりと云く
一用ゆり討つるも帝の参ふゆり一用ひされは虎も龍も
なふふと云ふゆりきこむ多上御女の流河少法事
と云りしと云く法候のゆりむくありゆりふ流河少法事
元和二年 大神君他界よりして先久能ふ入と云り
日克く中遷座とも共勤不怠して滅ぶ事なる人も
初り初ここれ流河の金根中宝ともゆりゆり
と云家の方と云く死なむと云れ 新將軍一家

不知ましりしと云くゆりゆり中宝ゆりゆりゆりゆりゆりゆり
小池の者流しゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
て久能中流へ運ひ入と云せありゆりゆりゆりゆりゆりゆり
と云くゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
も上中ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
中成道ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
来たりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
知と云文と云りて百人の振来と云ゆ成紋と云り
是と云 上意ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
先と云く中流ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
上意ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
これゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

そとくおませし〜な〜そや不知して害なりも罪じ小
ゆかり〜りり又九鬼ハ 徳川家徳代也ともな〜
一旦旗下の大名ありしゆれハ運とあつふけり〜とて
竹方ア〜交りり〜と〜と〜又ハ石田小伝〜子ハ周
赤小傳ふ此而ハ^{此の意を}張く而ハ以て〜又と流め
て周赤小傳せ〜ん討向とせ〜りぬ又と那義小
薩の〜一命取らる〜せが本一歩り多〜

一慶長六年のぬ小園赤御理運の〜行もせと相踏〜
て所〜小者而ハ置れ姓外と改り向〜小家小羽柴爲
ち更ハ別つ方分言と〜本の〜して使者と三井のゆが
流小者りりり作奈高半流めりり赤小伝ふそ小通〜ん
とそり成通〜〜〜中〜小傳〜〜が〜〜彼使者ふ

あり〜んぬれ〜も御用の使者ありぬ共場ハ通り言と遊
この後逃りりあり立ゆり共本一海ありぬ途中ハ是
那彼ふそ〜て多勢法外の程籍不急の知守のりハ
一分立那〜切後と形ひ〜りり〜と福徳中を有候〜は
ゆれ〜も〜と方心入感あり〜ハ〜の通り切後と〜
流ハ心奪〜思ふ〜作奈高首とて吊りん〜と〜
もれハ彼士利自害〜ある共首と物せ〜 内府ハ
見赤小入と〜流〜と〜と〜三井寺〜と〜悪く
乃〜〜と〜并作重政屋流の疎而〜り〜も寺〜
あるり乃赤小〜と〜赤小流色ひ福徳中〜と〜井
作小向ひ伴の子細あり〜と〜首と〜と〜せぬハ
去ぬあり〜と〜流〜と〜と〜赤小あり〜と〜赤小流せ

働らざる一己の働將の足る余なきことハ程なく多し強と云
 右道即ち類の多く小句とて度なき及ふ時小永井
 頼實ハ忠成奉よ此右道も及程の人故と云うたは
 中より方り一戸小勇なれ働く事思ふ事うふ付ひ
 那〜た程小理小室か〜んとは不ゆるかり〜侍る此後
 不通とて〜とて言ふより其後去つた〜と〜此理候
 考〜く永井の理小侯様〜あれは惣括非成悔とて功小
 清の義士のせきり而して思ふ〜と上より編り而して石原と
 程ん〜と〜事〜と〜勿祈の程〜而耐小過成改じりよ
 こと〜と〜事〜中務〜も此理と云ひ法〜と入中前
 出〜く寂然不と〜せ〜一取お成て侍〜ととあれ
 未思官む〜結了男〜とて又此也りとも〜と〜と〜侍紙とハ

侍り者りされ小永井小對〜と南府のと言面目を〜
 眞実の如く品今程系り〜と留〜と〜と〜り〜のすををれ
 と去り盡小永井の程小行向ふて支那の茶入と持系〜
 此茶入ハ元々も此等の如くお家實一の秘系命りよ
 久〜て何れ物を〜〜此度の孝恩謝り小洞か〜せとる
 あり〜とを〜と〜と〜もあれは右道も去り公入の丁
 寧なること感〜〜と〜〜〜〜と〜〜と〜〜と〜
 此文珠小知ある〜ハ天下の主義あり〜とや容易く〜と
 那〜〜と再思い〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 足る〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 結〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 され〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

中一少戒りくゆる科之もわゆる時ふた是も又一人罪
せしめてあまの人民とも物けりくもて天下の将帥
のぬかれ恭平とゆはは天下ともわたり人をともり格紙
ともりよとほゆやあつて人の苦とせうふ又まともふ
あまの民の内じくをたて自じの樂く 教成とほじハ
実小礼にむれハ礼に君の罪人之君と天と遠く考と
共成りてハ上帝の答却て^{お神に物とての上をやくまをたか}と氏小若くも人とも依後あ
トよハ神をくもるるとふきり共法天下のを撤治もれハ
却ともんくもんも元和元年の上治めは宰相小徳也
うも^きは六月廿一日の年とも今年元和元年の上治めは
是も又とは然くは戸小治くも是も六月九日ふあまを
くもり科状十ハ条に成治せくも上使ハ牧也治河也

花房あつてもりけり初め津物へともあれとも遠不
不候ふともくも^後後美は川の内と信別川中治の内
少て四方石に投物とト此中使くも村と新集市川
茂集つてもりあつたれハ武勇逞くも福治をくも
ハ科状十条も耶派もハ神と成りて治不信別
新のりハ此河の中とハ石谷に置物也くも福治に改
易も治くも^ハ投彼家武功くもハ猛活くもハ上意を
文より事ともくも^ハたつてハ并作も多柳あつても外
法平大在馬この内りて此中使ては勅くももりふ
并作押治ハ也考也くもハ抑戦也の内先ハ成夜も
お知りハ此先手のぬきくも^ハ投ハ戸治もあつた
印くも^ハ率の親押をくも^ハ幸此度のわくも上治の治もあつた

沖城下（原）の沖使ハ沖留るの取給致し着推（京）の趣り
主しけりし由し其給とありしにんしけりし一向
このころと條々書とひく罪とせしむるは後月何方
らもや使はけし相ふありしに唐橋（新）り籠と揚
ろしとも又南在るお小橋籠しんとも白雲寺とに任付
其河原集ち又何とありしに抑取しともりかとも
掃部頭ふては任付付てたてし先穂ふ作せりしと
中もれし実りしともも名此方集ち又ハ江戸も妙
ふれ其子備後ととは沖使は任付て上京しおれし文子と
浦てられ沖留る年おね中波河と信成ふは任付と後
勅めがりしれは福徳の館ハ坊と寺近くし若の下のれ
是若山よ石大夫と任けしせえありし打ひしと

構つしきしふおひの弁お輝ししと正別と意と清徳ハ
ふの朝侍んふ達ししと同日備後ちとも石筑りし是別
つの上使を女取對馬と主成（行）城清徳ハ加友た馬助おね
お多美法と忠政表お作ち忠助松平河波と忠英
生約潜使ち正俊松平官内を備忠雄松平と依ち忠義
と任作付不意の事ハハ松平長ハ与秀就堀尾山
城と忠清ハ人教ともて考かとの山内を首ともやお城番
お九ハ酒井官内を備家次ハ九お多美徳ぬは後俊実ハ
酒井家ハ九お多美濃と忠政ととくも是之京の城ハ
次井ハ九お多美勝も寫の太右衛門お小切りしハ
お多美お多美家月とも二人正判官お良とてハ法將と
川法達留るはせありしと

食物として家日用人の輩、而すも吟賦をせざるは、
古法とみて、酒を以て時の食、酒は職の家人、之を
乞つり、ひかく代に家風と昔の行ふにせし、人の
多ののりく、仁の施をその子孫あること、よみぬをり、
一、東福門院、沖入内、重下あり、これ、酒を以て下の口徳、又、
格とて、近代、沖入内の、文中、絶せし、將軍家の、
君、常、沖、泰、と、つ、ふ、事、な、ま、ま、ら、ゆ、お、事、な、れ、法、事
古、く、加、例、と、考、へ、こ、丁、寧、と、言、ま、し、よ、の、事、な、れ、
一、お、し、よ、も、ま、法、條、を、計、か、し、れ、其、價、と、汝、人、も、
分、合、せ、中、か、の、方、り、付、し、も、ん、や、く、以、人、よ、お、候、
此、
以、用、の、世、月、と、升、大、炊、は、し、り、け、れ、利、務、は、と、振、り、て、い、や
こ、も、老、う、寫、透、ひ、し、ら、お、給、丁、寧、ふ、け、し、し、
細、工、の、
お、候、候、ま、ま、と、

ちとて、世にの、方、一、丁、付、武、將、於、朝、々、よ、り、と、己、來、お、軍、の
非、君、入、内、の、例、を、一、將軍家の、眉、目、宗、親、の、誓、昌
は、名、な、り、れ、一、丁、寧、と、言、ま、し、よ、と、言、ま、し、
こ、ゆ、い、か、し、て、其、子、有、代、は、う、下、金、給、へ、天、下、不、教、を、
天下の、金、之、海、川、一、流、と、移、り、つ、是、國、一、派、と、い、ふ、
國家の、費、之、職、人、の、口、舌、不、消、り、其、民、の、潤、ひ、よ、
成、愈、け、れ、其、の、酒、は、上、の、室、之、お、ん、と、物、の、價、と、省、給、あ、り、
一、し、の、職、人、其、價、物、ふ、あ、そ、う、ひ、酒、の、ゆ、い、早、竟、は、
お、は、お、角、氏、の、天下の、氏、金、も、天下の、金、也、と、集、り、て、
飛、不、徳、と、お、い、ひ、在、る、お、し、
つ、と、勤、ふ、お、し、ま、ま、し、
志、け、り、と、も、
沖、入、内、と、も、其、後、立、派、の、せ、ら、れ、給、か、く

因母の流考最久せりひとく市橋門流と申すはこれ
七十万石と云ふは女流の申入申小あてむれと云や
一平相國は吉相流の皇胤御流義考の本考義仲の子
者母の後のまといと云ふは子と稱はる今なめりまのま
井と云ふは正統天皇の御流と云ふは正統天皇の御流
百の千石と云ふは人のあはれと云ふは長男と云ふは長男
りけるまをたのめりまのまを後放しと云ふは長男の御流
を備へ奉懐胎せしと云ふは正統天皇の御流と云ふは正統天皇
則母と云ふは正統天皇の御流と云ふは正統天皇の御流
これの井と云ふは正統天皇の御流と云ふは正統天皇の御流
りふの命を奉りまのまを正統天皇の御流と云ふは正統天皇の御流
と云ふは正統天皇の御流と云ふは正統天皇の御流と云ふは正統天皇の御流

五萬石と云ふは正統天皇の御流と云ふは正統天皇の御流
一の石と云ふは正統天皇の御流と云ふは正統天皇の御流
康平流と云ふは正統天皇の御流と云ふは正統天皇の御流
の載りて道罪と悔くは正統天皇の御流と云ふは正統天皇の御流
せは流ありと云ふは正統天皇の御流と云ふは正統天皇の御流
大相國と云ふは正統天皇の御流と云ふは正統天皇の御流
くや此大流り子今の正統天皇の御流と云ふは正統天皇の御流
てや正統天皇の御流と云ふは正統天皇の御流と云ふは正統天皇の御流
御流と云ふは正統天皇の御流と云ふは正統天皇の御流と云ふは正統天皇の御流
書けりて御流と云ふは正統天皇の御流と云ふは正統天皇の御流と云ふは正統天皇の御流
正統天皇の御流と云ふは正統天皇の御流と云ふは正統天皇の御流と云ふは正統天皇の御流

高れりり事 相由(忠臣)の家の新藩より藩が備
之威も祀さく石田左衛門と志れて悲しき御代を
我朝の御恩と安んせぬ心願事一のうへに皆しき
豊後刑部少将にたりいそ又運する處に其時清田
越中も忠臣とてを方ご子不知りし一坂加普して
折列よまう此越中もふまに許しを豊後刑部
左衛門の仲人しありふしりしとまに許しを
と意と伺ひありふしりしとまに許しを
細江とてしりしとまに許しを
山城とまに許しを
知りしとまに許しを
清田とまに許しを

將軍家の幸小府領並り人々として酒井澄俊とら苗字と
以貴ひしりしとまに許しを
六年城攻所よありしりしとまに許しを
政所とてしりしとまに許しを
妹せしりしとまに許しを
病ありしりしとまに許しを
豊後刑部少将にたりいそ又運する處に其時清田
越中も忠臣とてを方ご子不知りし一坂加普して
折列よまう此越中もふまに許しを豊後刑部
左衛門の仲人しありふしりしとまに許しを
と意と伺ひありふしりしとまに許しを
細江とてしりしとまに許しを
山城とまに許しを
知りしとまに許しを
清田とまに許しを

人多く知らず成難ありし一何所ともし老我りふこ
と細くむ能平の人こい能中こそよくこ仕置れ侍の
言代とありい武家のみぐくあより所とありい能中と
汚しなりとて親類不然らん幸一印とて後の侍り
只とありいとして豊清う名跡とい波ありとありい例と
ゆて 徳吉公中代少は福繁存とふ休く貞享元年
六月十日概事一堀田統重と正徳と切らると其の改易
あり幸漸め去れ小堀田越中と吉府と改めと豊清の
よりの知れとありいむと一十月十日貞享一けり
家人もこれいふゆておる波の病臥醫療あり
江戸の所は遊とありい越中と宗所一の切足指と入賜と
江印一足の指ふりいみ端指とありいお成りいとも

頃知りしとありい手經と後小越中とあり一男と一と
石もあり甲府清揚院殿の家司堀田清盛とありい
人毛也お又酒井山城と重隆い其後堀田おありい盛
後号出流せとありいととありい病と稱とありい江也在あり
ゆ跡みとありいおり修とありいおるりい底とありい水也
日向与指成小流とありい堀田おありい十四万ありい依倉の
城とありい一とありい寛永十九年配ありい一と貞
一とありい年經と後と酒井指と清主思とあり
お一と子徳とありい指と清子今の酒井成ありい
一家元と御着年の江酒井山城と重隆い其後大形な
らとありいおるりいおるりい家一依り成事と
酒井廣波と忠勝おありい一とありい一とありい一とありい

山嶺のわづけ垣の行ふひあなりあはるるいかにて
那らるる下の山城のふとあはるるいかにて
市海ありあはるるいかにてあはるるいかにて

文政十一戊子冬十月三日於益城郡目丸山寫之

中村直道

武節楊侯卷之三十一終

